世界から東日本へ　国境を越えた「痛み」の共有（東日本訪問記）

日　程：2013 年２月３（日）～２月６日（水）
場　所：東日本大震災の被災地（宮城県七ヶ浜町、気仙沼市、岩手県釜石市、大槌町）
参加者：ルトフ・ラフマン（アフガニスタン）、彭廷国（中国）、
ジャン・クロード・レフェルブ（ハイチ）、植田麻紀（中国語通訳）、
中田紗綾（フランス語通訳）、岡本千明（英語通訳）、尾澤良平（ドライバー）、
吉椿雅道（全体コーディネート）、上野智彦（スタッフ）
協力団体：レスキューストックヤード、シャンティ国際ボランティア会、気仙沼復興協会、
阪神高齢者・障害者支援ネットワーク、被災地ＮＧＯ協働センター

２月３日

◆宮城県七ヶ浜町

東北で最も小さな町が、宮城県七ヶ浜町です。震災直後から七ヶ浜で支援にあたっているレスキューストックヤードの石井良規さんのご協力で、現地の現状の視察を行いました。現地の拠点であり、被災者とボランティアの交流の場でもある「きずな館」で石井さんに現在の七ヶ浜の置かれている状況を説明して頂きました。

七ヶ浜は町の 30%が浸水し、1212 世帯の家屋が被災しました。そして人口約２万人のうち 107 名の方の尊い命が犠牲になりました。現在も約 400 世帯の方々が仮設住宅で不自由な生活を強いられています。また、６カ所の高台移転と２カ所の公営住宅の建設が予定されていますが、高台の土地を造成して住宅を再建するまでに２年以上かかるので、被災者の方々は不安を抱えているということです。被災者の中でも経済状況によって格差が出てきているというお話もありました。

アフガニスタンのラフマンさんは、津波を被ったエリアでの建築制限や高台移転に対して「元の場所に住みたい人もいるだろう。だから、元の場所に住みながら避難できる方法は考えられないのか」と語りました。紛争よって自分たちの町を追われ、ようやく町に帰ることが出来たアフガニスタン人にとっては、故郷に戻って住むことの意味を思ったのでしょう。また、行政の支援体制について質問するハイチの元市長であるレフェルブさんや中国の簡素な仮設住宅との違いに驚く彭さんの姿も印象的でした。

きずな館での被災状況の説明

仮設住宅についての説明

その後、町内の仮設住宅や被災したエリアを案内していただきました。平地で家を流されたエリアと、高台であったことで難を逃れたエリアの明暗や除塩作業中の田畑、防潮堤の建設現場などを視察させていただきました。３カ国のゲストは極寒で被災者の方が如何に避難生活を送っているか、津波の被災エリアの広さ、防潮堤の大きさなどを実感したようでした。

（吉椿雅道）

除塩作業中の田畑

防潮堤の建設現場

２月４日

◆宮城県気仙沼市

気仙沼市は岩手県に隣接する宮城県最北の都市です。リアス式海岸であることから街に入り、港が見えてようやく海を目にすることができました。古くから遠洋漁業の基地であったこの町も大きな被害を受けました。地盤沈下を起こし、津波により建築物が流されてしまった気仙沼市街地に入るとゲストは黙ってカメラを向けていました。

地盤沈下した気仙沼市街

復興商店街

今回、この気仙沼でコーディネートをして頂いたのがシャンティ国際ボランティア会（ＳＶＡ）の白鳥孝太さん、笠原一城さん、気仙沼復興協会（ＫＲＡ）の塚本卓さんです。ＳＶＡは発災以降、気仙沼で支援活動を行っています。バスの中から被災地を見ながら、ＳＶＡのスタッフの方から発災当時の状況が事細かに説明されました。流されてしまった線路や陥没した漁港など震災の爪痕が多く残っています。

その後ＳＶＡ気仙沼の事務局へと向かい、先に視察した場所の津波発生当時の映像などを見せていただきました。また、同団体のこれまでの活動を紹介していただき、ゲストの方々も熱心に耳を傾けていました。避難所の女性たちが作ったアクリルたわし「あんでねっと」をお土産にいただくと非常に嬉しそうにしていました。

ＳＶＡ事務所での交流

ＳＶＡスタッフの皆さんと

次に向かったのは、阪神障害者・高齢者支援ネットワークが支援している面瀬仮設住宅です。ここは面瀬中学校の校庭に建てられた仮設住宅で、現在、132 世帯がここで生活をしています。この面瀬仮設住宅で被災者支援に携っている看護師の藤田さんにご自身の活動と避難所での暮らしについてのお話を聞きました。

面瀬仮設住宅の集会所では藤田さんをはじめ、ボランティアで全国から来ている看護師や療法士の方々が 24 時間 365 日必ず誰かしら待機しているようにしています。20～30 人の方が集会所に出入りしておりイベントがあれば 100 人くらい集まることもあるそうです。しかし、なかなか外に出てこない方や、具合が悪くても病院へ行かない方もいて、そのような方々への訪問も行っているそうです。

面瀬の仮設住宅にて

流された船の前に置かれた鎮魂の碑

ラフマンさんは特に仮設から出た方の生活について気にされていました。最大 153 世帯の方々が入居していた面瀬仮設からは約 20 世帯が新たに家を再建させたり、別の仮設住宅に移ったりしたそうです。レフェルブさんはハイチの現状と比べ、テント暮らしがなお続くハイチの避難キャンプの生活や自身が過去にＮＧＯなどの支援団体と被災者を繋ぐ仕事をしていたことを語り、ソ

フト面のケアの重要性を再認識していました。

次に気仙沼市街の鹿折を訪れました。ここは津波と火災によってほぼ全ての建物ががれきと化してしましました。また大型漁船が住宅地のど真ん中に打ち上げられ現在まで残されています。この漁船は鎮魂碑となっていて、今後もモニュメントとして残そうという動きがある一方、震災当時を思いだして辛いので撤去してほしいという声もあるそうです。

夕食の際にはささやかな宴会が催されました。ラフマンさん、レフェルブさんは箸を上手に使いながら初めての刺し身を体験しました。また、宴席の中でレフェルブさんと彭さんが素晴らしい歌声でそれぞれの国の歌を披露してくれました。ラフマンさんは最後に「地球は広いが世界は一つ。これからも助けあって行こう」と言い、CODE や今回出会った彭さん、レフェルブさんとこれからも手を取り合って行くことを約束しました。

（上野智彦）

交流を深めた宴会

翌朝、雪で真っ白になった気仙沼港

２月５日

◆岩手県釜石市　中之島仮設住宅

被災地ＮＧＯ協働センターの増島智子さんと頼政良太さんの案内で釜石の中之島仮設住宅にお邪魔し、自治会長の佐々木さんご夫妻と交流させていただきました。佐々木さんご夫妻は、釜石市内に 66 か所ある仮設住宅のひとつで暮らされています。震災前、鵜居の沿岸に住んでいた佐々木さんは現在、仮設住宅の自治会長をしながら、「壊れてしまった自分達の町を自分達の手でいいものにしていきたい」と奔走されています。

こちらからも３カ国の被災や復興の状況を簡単に説明し、その後ゲストの方々から復興の状況を話して頂きました。中国の彭さんからは、被災者の住宅再建のローンの返済が困難なことやそれに伴う若者の外部への出稼ぎの現状が話されました。釜石は元々、人口約４万人ですが、震災で仕事を失くしたことで約１万人が生活のために外部に出てしまっているそうです。将来この町に残るのはお年寄りばかりになってしまうのを非常に懸念されていました。また、復興事業による雇用についてもその多くは中央から来た労働者がほとんどで、地元の被災者の人たちが潤うことはないと話されていました。故郷を離れざるを得ないこと、復興の過程での雇用問題など中国四川大地震と共通する状況がありました。

アフガニスタンのラフマンさんからは、地震、干ばつなどの自然災害だけでなく紛争も多いアフガニスタンでは、政府が弱く、貧しいというお話がありました。災害後、被災者のほとんどの人は、粗末な掘立小屋や小さなテントに住んでいると語るラフマンさんには日本の仮設住宅が非常に立派に見えたようです。

また、ハイチのレフェルブさんからも、３年経った今でもほとんどの被災者が狭いテントで暮らしていることやコレラの深刻な問題、震災前からある貧困によって復興がまったく進んでいないことが語られました。

被災者どうしの交流

佐々木さんご夫妻と

それに対して佐々木さんは、「大変な思いをしたけど、海外の皆さんに比べれば、うちの方はまだ幸せだな」と言い、その後「でも、自分達が災害に遇って大変な思いをして、こうやって国が違っても色んな人達と話できて」と嬉しそうでした。そして「自分達が立ち直って生活出来るようになったら、いつか自分自身でも支援をしたい」と語られました。

通常、被災地を訪れるとこちらが被災者の方のお話を聞くことが多くなりがちですが、冒頭から佐々木さんは「被災から数年経ったそれぞれの被災地の状況を聞ければ助かります」と言われました。佐々木さん達は、今、「自分たちの手でいい町を創って行きたい」と何か少しでも海外の復興の状況が参考になればと思ったのかもしれません。

でも、それ以上に海外やＫＯＢＥなどの国内の被災地の状況を知り、つながることが何よりも大きな力や希望になっていくことをお互いに実感した時間でした。

（吉椿雅道）

◆大槌町　吉里吉里第２仮設住宅

被災地ＮＧＯ協働センターが、生きがい・仕事づくり事業である「まけないぞう」を行っている大槌町の吉里吉里第２仮設住宅を訪ねました。「まけないぞう」は、被災者がぞうの形の壁掛けタオルをつくって手仕事の収入とするもので、阪神・淡路大震災後の 1997 年に同団体が開始した事業です。さっそく３カ国のゲストも「まけないぞう」作りに励みます。被災者の女性達が先生になって、手を取って指導していきます。

ゲストは皆男性ですが、意外に器用に針と糸を使い、女性達にも感心されていました。普段は作り手である女性達が、初めて会った外国の人に教える様子はどこか誇らしげで嬉しそうです。人は、その人の尊厳や役割を大事にされることで元気になっていくのでしょう。

「まけないぞう」づくりの様子

その後、仮設住宅のある女性のお宅にお邪魔しました。お宅には沢山のまけないぞうが飾ってあり、「自分の子どものように可愛いの」と嬉しそうでした。大勢で押し掛けたにもかかわらず、その女性はほとんど座りもせずに手造りの漬物やお汁などを沢山振る舞ってくれました。別れ際、彭さんが「お体に気をつけてくださいね」と語りかけると、女性は堰を切ったように涙を流しました。それを見たラフマンさんは、何故見知らぬ外国人が訪ねて来たことで泣くのか最初は理解できなかったそうです。しかしその後、自分たちが訪ねたこと自体に大事な意味があったと深く知ったそうです。これまでＣＯＤＥが大事にしてきた、国を超えた「痛みの共有」を感じた瞬間でした。

（吉椿雅道）

仮設住宅で交流した女性と

◆岩手県釜石市　駒木山不動寺

釜石市の高台に駒木山不動寺というお寺があります。不動寺は東日本大震災の際、避難所として住民の受け入れやボランティアの宿所として機能し、現在は被災地 NGO 協働センターなどとともにまけないぞうでの被災地支援を行っています。この不動寺の尼僧である森脇さんにお話を聞きました。

不動寺は大きな岩の上に建てられていたため、地鳴りはしたが比較的地震の際揺れが少なく被害がほとんど無かったそうです。また井戸がありプロパンガスであったため、電気以外のライフラインが生きていた一方で、情報が何も入ってこないため事態の深刻さに気付くのが遅くなったそうです。その後明らかになる被害に、プロテスタント教会や淀川キリスト教病院などと支援を行うようになりました。また現在は、まけないぞうの普及とともに不動寺でも信者の方がまけないぞう作りを行っていて、コミュニティが作られているそうです。

レフェルブさんは不動寺の活動に加え、初めて触れる仏教にも非常に興味を示していました。彭さんはまけないぞう事業における不動寺の活動に関して質問されました。森脇さんの支援活動のことに加え、新たに仏教という切り口から日本文化や日本建築にも関心を持っている姿が印象的でした。

この訪問は、ゲストの方々にとって被災者の暮らし、ボランティアや支援団体の活動を通して、改めて自国の復興について見つめ直す場になったと思います。また同時に、交流した方々にとっては、同じ被災者である一方で状況や文化、生活も違うゲストの方々とお互いに学び合う場となりました。ゲストの方々は学んだことを自国の復興に結び付けようとしているようでした。ゲストの方や仮設住宅の方が自分の故郷について語る姿から、いかにその土地に思い入れがあり復興を望んでいるかが伺えます。そしてこの交流からつながりが生まれ、新たな絆となっていくのだと思います。

（上野智彦）

不動寺にて森脇さんのお話を聞く